

解説リーフレット

パネル展「将門と忠常—千葉氏のルーツを探る—」

千葉市立郷土博物館

令和2年5月27日～7月12日

【パネル1】坂東平氏の登場—平安時代なかばの関東の状況—

○地方支配の変質と関東の状況

京の朝廷は、地方を支配するために国司（現在の県にあたる行政単位「国」の役所「国府」の役人）を派遣しました。律令制度に基づく徴税システムが崩壊したため、10世紀から国司が税の徴収を行うようになりました。一方、国司の厳しい徴税に苦しめられた郡司（国の下の行政単位「郡」の責任者）や農民は大きな不満を抱くようになっていきました。

一方、9世紀ごろの房総では、「俘囚」（東北地方から移住させられた人々）がしばしば反乱を起こしました。また、関東は良馬の産地として、官営牧場をはじめ多くの馬を飼育していました。馬は貴重な輸送力でしたが、「徭馬の党」と呼ばれた輸送集団が強制的に馬を奪うなどして人々を苦しめていました。こうした状況にも関わらず、地方における治安悪化はほとんど野放しで、特に関東は「群盗、山に満つ」という状態でした。

○貴種の下向と関東への土着

桓武天皇のひ孫高望王は寛平元年（889）頃「平」の姓を賜り、皇族を離れました。その後上総国（現在の千葉県中部）の国司（介）として、子どもたちを伴い赴任しました。朝廷は武勇に優れた高望が治安を回復することを期待したようです。高望は任期終了後も任地に留まり、子どもたちは各地の有力者と姻戚関係を結んで関東各地に土着しました。長男平国香は常陸国（現在の茨城県）の国司（大掾）となり、次男平良兼は下総国（現在の千葉県北部・茨城県の一部）の国司（介）に、三男平良将（良持）は鎮守府将軍（東北地方の軍事拠点「鎮守府」の長官）となりました。彼らは治安の乱れた状況の下で、武装をするようになり「兵」と呼ばれるようになったのです。これが「武士」の起こりと言えます。彼らは武力を背景に開墾を進め、所領（所有・支配する土地）を拡大していくこととなります。

このように関東各地に土着し勢力を広げた平氏を「坂東平氏」と呼び、秀郷流藤原氏や清和源氏とともに武士としてこの地に栄えました。

【パネル2】平将門関東にて立つ！—反乱勃発と関東全域拡大の背景—

○関東の英雄平将門〔?～天慶3年(940)〕

平将門は高望王の三男の平良将(良持)の子です。「兵」として知られ、下総国猿島郡・豊田郡(現在の茨城県坂東市・常総市周辺)などを本拠としました。将門は台地の間に谷が入り込む地形的な特色を利用し、低地では開墾を進め、台地上を牧(馬の放牧場)としました。将門は騎馬を中心に戦ったといわれています。平安時代には馬は国家が管理する牧で飼育されていました。9世紀に入ると地方に土着した貴族などが牧の経営にたずさわりましたが、将門はそうした牧の管理者であったという説もあります。さらに、砂鉄を利用して製鉄を行い、これを武器に加工しました。猿島・豊田郡にも馬牧と製鉄遺跡が見つかっています。馬や鉄は将門の勢力基盤との関連で注目されています。

○戦乱の勃発と関東全域への拡大—私戦から反乱へ—

当時の武士にとって所領を守ることは最も重要なことでした。そのため、所領をめぐる同じ一族が争うことも珍しいことではありませんでした。

承平5年(935)、将門は父の残した所領をめぐる伯父の平国香を殺害し、承平7年(937)には平良兼や平良正を破るなど同族間の争いは激しさを増しました。

また、将門は国府と在地の武士との争いにも関わるようになりました。

天慶2年(939)には国司からの庇護を求めた藤原玄明をめぐる常陸国府(現在の茨城県石岡市)を襲い、公然と朝廷に反抗するようになります。将門は、下野国(現在の栃木県)、上野国(現在の群馬県)の国府を占領し、兄弟や仲間の武士たちを関東諸国の国司に任命しました。さらに将門は「新皇(新しい天皇)」と称し、関東全域を手中におさめ、関東の自立を画策したともいわれています。朝廷による地方支配に強い不満や反発を感じていた関東の人々は将門を強く支持しました。このことが、反乱を関東全域に拡大させた要因といえるのではないのでしょうか。

【パネル3】見果てぬ関東自立の夢—朝廷の対応と反乱の終結—

○反乱への朝廷の対応

同じ頃、藤原純友^{ふじわらのすみとも}は、瀬戸内海^{せとなくみ}の海賊を従え、各地の国府を襲撃しました。将門の乱とあわせて「承平・天慶の乱^{じょうへい・てんぎょう}」と呼んでいます。

天慶3年^{てんぎょう}（940）、朝廷は将門を討つため参議^{さんぎ}の藤原忠文^{ふじわらのただふみ}を征東大將軍^{せいとうだいしやうぐん}（追討軍の総司令官）に任命し、乱の鎮圧に向かわせました。なお、当時の朝廷は直属の軍事力を持っていませんでした。そのため、朝廷は将門と敵対関係にあった関東の有力者の兵力を利用しようとしたのでした。

○平将門の乱があっけなく終息した理由

忠文たちが関東に到着する前に、平国香^{たいらのくにか}の子の平貞盛^{たいらのさだもり}、下野国^{しもつけのくに}で大きな勢力を有していた藤原秀郷^{ふじわらのひでさと}らが朝廷の呼びかけに応じて挙兵しました。

将門は最初は戦いを優位に進めました。当時の武士の兵力は、主君と固く結束した少数の「従類^{じゆうるい}」と、普段は農業や交易を行っている大多数の「伴類^{ばんるい}」からなっていました。「伴類」は戦いが不利になれば逃亡してしまいました。なにより伴類は農繁期に帰郷させなくてはなりませんでした。

貞盛や秀郷は、将門が伴類を帰して兵力が少ない時を狙って反撃に出ました。下総国^{しもづきのくに}猿島（現在の茨城県坂東市周辺）の戦いで、将門は流れ矢が当たって討ち死にしました。一族たちもことごとく討ち取られ、首は京でさらされました。

○反乱が残したもの

この乱については、軍記物の先駆けとしても有名な『将門記^{しやうもんき}』に詳しく述べられています。

将門の乱が及ぼした影響については、坂東平氏^{ばんとうへいし}や秀郷の子孫^{ふじわらし}の藤原氏^{ふじわらし}など関東に土着した有力氏族の地位が向上したことが注目されます。坂東平氏は平高望以来関東にその勢力を有してきましたが、さらに勢力を伸ばしていくことになりました。千葉氏の祖である平良文^{たいらのよしふみ}は、将門の乱の際にひそかに将門に味方したという説もあります。また、良文は将門討伐には加わっていませんでしたが、将門の旧領^{きやうりやう}を与えられたといわれています。

なお、清和源氏の祖源経基^{せいわげんじ}は将門の反乱を告発した功績が認められ朝廷から従五位下の位^{じゆごいのげ}を授けられました。将門の乱は鎮圧に貢献した武士たちの地位を向上させ中央へ進出するきっかけとなりました。

【パネル4】坂東平氏の反乱再び—両総を舞台に平忠常の大乱勃発—

○両総平氏の祖平忠常〔康保4年(967)～長元4年(1031)〕

平忠常の祖父は平将門の叔父の平良文、父は陸奥国（現在の福島県・宮城県・岩手県・青森県）の国司（介）平忠頼で、母は将門の次女と伝えられています。忠常は代々の地盤である上総国・下総国に勢力を有するとともに、在庁官人（現地の有力者から採用される国府の役人）として、上総権介、下総権介に任命されました。忠常が房総を舞台に起こした反乱は、平安時代の関東地方では将門の乱以来の大規模なものでした。

○反乱の勃発と追討使派遣の裏にうごめく貞盛流平氏の野心

長元元年（1028）忠常が安房国の国司（守）を殺したことで反乱が広く知れわたるようになりますが、房総地方ではこれ以前から戦乱状態にあったと考えられています。原因は、忠常に対して現地の人々の広範な支持があったことから、収奪を強める国司に対する紛争であったものと考えられます。

同年6月、朝廷は忠常追討の宣旨（天皇の命令）を出すとともに、追討使に平貞盛の子孫の平直方たちを任命しました。しかし、忠常は朝廷に逆らう気はなく、「伊志みの山」（現在のいすみ市付近）にこもり内大臣藤原教通に書状を送るなどして追討令を撤回させようとしたが失敗に終わり、朝廷との戦いに発展しました。

直方は追討に積極的でした。これは、直方と忠常とがライバルの関係にあり、直方がこの機会をとらえて忠常から関東地方での覇権を奪う好機と考えたためです。この二人は、長らく敵対関係にありました。

このように、国司の収奪に対する抵抗から始まった忠常の乱は、代々にわたる忠常と直方との私戦的側面が加わり、激化していったのでした。

【パネル5】大乱遂に終息す—「亡国」と化した房総と清和源氏の台頭—

○反乱の終息

長元元年（1028）8月、平直方は京を出発しました。翌年、直方の父平惟時が上総介に任じられて忠常の追討に加わりましたが追討ははかどらず、長元3年（1130）3月、安房国の国司（守）は京に逃げ帰っています。

戦いを優位に進めてきた忠常ですが、長引く戦乱によりその勢力に陰りがみえてきました。同年5月には忠常が出家するなど講和の意思を見せています。朝廷も反乱の早期終結を強く望むようになりました。

同年7月、朝廷は直方を罷免、清和源氏の源頼信に追討を命じました。頼信は河内国（現在の大阪府）を本拠地とし河内源氏と称されています。『今昔物語集』は、忠常の乱の10年以上前のこととして頼信が忠常と主従関係を結んだという逸話を伝えています。朝廷は頼信と忠常の個人的関係を利用して、反乱の終結を図ろうとしたとも考えられます。頼信は忠常の子を伴って関東に向かいました。長元4年（1031）4月、忠常は戦わずして頼信に降伏し、数年間続いた大反乱はここに終結しました。

忠常は罪人として京に護送される途中、美濃国（現在の岐阜県）で病死しました。関東に勢力を広げることを狙った平直方などの貞盛流平氏は、追討に失敗しその目的を果たせませんでした。一方、源頼信は、坂東平氏の多くを配下に加え、関東における清和源氏発展の基礎を築いたのでした。

○戦乱により「亡国」と化した房総

忠常の乱により、戦場になったこと、忠常と朝廷両軍による兵糧などの徴発を受けたことにより、この地域はひどく荒廃しました。反乱末期の長元4年3月の下総国府からの報告には、「安房・上総・下総はすでに『亡国』なり」とあります。長元7年（1034）の上総国府の報告では、反乱により耕作可能な田地がほぼ失われたこと、反乱が終結して3年経ってようやく復興の兆しが見えてきたとあります。忠常の乱により房総諸国は大変な被害を受け、その復興が大きな課題となったのでした。

【パネル6】両総平氏の勃興 — 「亡国」からの復興と武家政権への道 —

○復興を担った平忠常の子孫たち

「亡国」とまでいわれた房総地方の復興を担ったのは、平忠常の子孫たちでした。彼らは反乱に参加した罪に問われることなく、戦乱で荒れ果てた土地に逃げ散った人々を呼び集め、再開発を進めたのです。彼らは「開発領主」として開発した土地を「根本私領」とし、その地を名字として名乗る在地領主となっていくのです。こうして在地領主の私領としての中世の郡や郷が成立

したのです。また在地領主の中には、所領を皇族や有力貴族・寺社に寄進し国司の侵害から守ろうとしました。これが莊園です。

○両総平氏の成立

忠常の子孫たちは各地に広がり、「武士団」を組織しました。これは、将門時代の従類・伴類とは異なり、領主とより強く結ばれた「家の子」・「郎党」からなる戦闘集団でした。

上総国・下総国に勢力を広げた忠常の子孫は「両総平氏」と呼ばれます。

忠常の孫の平常兼は下総国に勢力を伸ばし、その弟の平常晴は上総国を地盤としました。平常兼の子が大治元年（1126）に千葉を本拠としたとされる千葉常重で、その子が千葉常胤です。平常晴の孫が常胤とともに源頼朝を助けて活躍した上総広常です。

この他にも白井氏・白井氏・匝瑳氏・海上氏・千田氏・原氏・長南氏・印東氏・金田氏など、房総各地の地名を名字として名乗る武士たちがいます。これらの中でも千葉氏と上総氏が有力で、上総氏は両総平氏の族長として大きな勢力を持っていました。

彼らの名前のほとんどに「常」の字が入っていますが、これは忠常の諱の一字「常」を受け継いだもので、忠常こそが両総平氏の祖として意識されていたことを示しています。

この時期、院政を行った上皇が直属の軍事力（北面の武士）を組織したことがさらなる武士の政界進出を促し、京の貴族たちの政権争いも、武士たちの力で決着がつけられるようになります。千葉常胤や上総広常も源義朝（頼朝の父）の下で保元の乱（1156年）に参加していくこととなります。

頼朝が創設した「鎌倉幕府」は東国を基盤とした初の武家政権であり、平将門たち関東の武士の夢が実を結んだものといえるかもしれません。

【パネル7】反乱の記憶と再生①—「反逆者」平将門を祖とした相馬氏—

○千葉一族としての相馬氏

相馬氏は、下総国相馬郡（現在の我孫子市・柏市、茨城県取手市・守谷市など）を本拠とした千葉氏の一族です。相馬郡は千葉氏の祖といわれる平良文が将門の乱の功績により与えられたといわれ、良文の子孫の平常晴が千葉常重に譲りました。

大治5年（1130）、常重はその地を伊勢神宮に寄進し相馬御厨という莊園とし、翌年息子の千葉

常胤^{つねたね}に引き継がれました。しかし、その後の平治の乱^{へいじ}（1160年）で敗れた源義朝と常胤が主従関係^{しゅじゆん}を結んでいたことで相馬御厨^{あまのごくり}を失いましたが、常胤は治承4年（1180）の源頼朝の挙兵^{きよひら}に応じたことで相馬御厨^{あまのごくり}を回復し、後に次男の相馬師常^{あまのしじょう}が受け継ぎました。

○朝廷への「反逆者」将門を一族の祖とした相馬氏

相馬氏の系図の中には先祖を平将門^{たいらのまさかど}とするものがあります。師常が将門の子孫師国^{もろくに}の養子となるというものです。これには将門の子孫であることを主張し、一族の出自を誇る意向が現れていると考えられます。

将門は「相馬小次郎^{あまのこじろう}」と号したとされるので、相馬郡があった地域には現在でも将門にまつわる伝承地が多く残っています。岩井（柏市）には将門神社^{まさかどじんじや}があり、隣の龍光院^{りゅうこういん}には将門の娘の如蔵^{にょざう}尼が建立したと伝えられる地蔵堂もあります。手賀沼対岸の日秀^{ひびり}（我孫子市）にも将門神社や将門の井戸、将門の守り本尊と伝えられる聖観音^{しょうくわんのん}を安置する観音寺^{くわんのんじ}があります。

師常は千葉常胤から陸奥国行方郡^{むつのおくになめかたぐん}（現在の福島県相馬市・南相馬市など）を受け継ぎました。13世紀に相馬氏の一部が陸奥国に本拠を移し、大名として明治維新まで続けました。

なお、下総国に残った相馬氏は、守谷城^{もりやじょう}（現在の茨城県守谷市）を居城として戦国末まで続けました。

○将門由来の神事「相馬野馬追^{あまのまおい}」

現在も相馬市・南相馬市で行われている重要無形文化財「相馬野馬追」は、もともと平将門が下総国で行っていた、馬を敵軍に見なして追う行事を再現したといわれています。甲冑競馬^{かっちゅうけいば}や神旗争奪戦^{かみかざり}が有名ですが、実は馬を追い込んで素手で捕まえる野馬懸^{のまがけ}の行事が昔の名残を留めた行事と言われています。

【パネル8】反乱の記憶と再生②—生き続ける「将門伝説」の世界—

○伝説となった平将門^{たいらのまさかど}

平将門^{たいらのまさかど}は「関東の英雄」と「非業^{ひごう}の最期を遂げた怨霊」の両面を合わせ持つ「神」となりました。

将門伝説は、北は東北から南は九州まで全国に分布しています。本拠であった岩井^{いわい}（茨城県坂東市）には、将門を祀る国王神社^{こくおうじんじや}などが残されています。東京にも将門を祭神とする神田神社（神

田明神、東京都千代田区外神田) や築土神社 (同区九段北)、将門の首が落ちた所とされる将門塚 (同区大手町) があります。黒砂 (千葉市稲毛区) は、逃げてきた将門方の人々が開墾したと伝えられています。

○将門と千葉氏

千葉氏は将門を先祖として崇拝しました。千葉氏の祖平良文^{たいらのよしふみ}が将門の養子になったといわれ、『源平闘諍録』^{げんぺいとうじょうろく}には、千葉常胤の孫の千葉成胤^{へいしんのう}が「平親王将門ニ八十代ノ末葉^{ぼつよう}」と名乗りを上げた^{しちてんのうづか}と記されています。七天王塚 (千葉市中央区) が将門の七人の影武者^{かげむしや}の墓と伝えられるのも、千葉氏の将門信仰の記憶を伝えている可能性があります。

戦国時代に千葉氏の本拠となった本佐倉城^{もとさくらじょう} (現在の酒々井町・佐倉市) の近くには、将門口ノ宮^{まさかどくちのみや}神社や将門を裏切った桔梗^{ききよう}の前の墓^{まほ}と伝えられる塚 (ともに佐倉市将門町) があります。

一方、朱雀天皇^{すざくてんのう}の命を受けた寛朝^{かんちよう}が神護寺^{じんごじ} (京都市右京区) の不動明王^{ふどうみょうおう}を奉じて下向し乱の鎮定を祈願したところ将門が敗死したと伝えられています。この不動明王が成田に留まったことから成田山新勝寺^{なりたさんしんしょうじ}が開かれたと伝えられています。

○現代に生きる将門

昭和 51 年 (1976) には将門を主役にした大河ドラマ「風と雲と虹と」が放送されました。荒俣宏^{あらまたひろし}の『帝都物語』^{ていとものがたり}は、将門の怨霊の力で東京の破壊を狙う魔人加藤保憲^{かとうやすのり}との攻防を描き、映画も大ヒットし、続編の『帝都大戦』^{ていとたいせん}・『帝都物語外伝』^{ていとものがたりのいでん}も制作されました。

平将門は、様々なメディアに関東の英雄・未だ鎮まらぬ怨霊などの多様な姿を取って、現代の人々の心の中に脈々と生き続けているのです。

○「将門伝説」の広がり、その背景

今から千年以上も前の平将門の伝説が、かくも広範囲にしかも現代まで生き続けているのは何故でしょうか。これは、歴史のなかで多様な目的をもって「将門の乱」の記憶を再生し続けた結果だと考えるべきです。また、伝説を生みだしたそれぞれの時代の社会がそこに反映されているのではないのでしょうか。

後世に多様な伝説を発芽させる種を蒔いたという点で、平将門は他に類例がない人物といえましょう。